

ま、ルークの父親から、ルークが妻のカレンと一人息子を殺したうえ自身も自殺してしまった“一家心中事件”の調査を依頼する手紙が届くところから物語が始まっていく。それを受けて、アーロンは20年ぶりにキエワラへの帰郷を果たし、地元の警官グレッグ・レイコー（キア・オドネル）と共に調査（捜査？）に乗り出すことに。

本作の原作になったのは、イギリスからオーストラリアに移住し、メルボルンに居住する推理小説作家ジェイン・ハーパーの『渇きと偽り』。主演のアーロンを演ずるエリック・バナはオーストラリアのメルボルン出身のハリウッド俳優だ。オーストラリア出身のハリウッド女優と言えばすぐにニコール・キッドマンを思い出すがエリック・バナも相当有名な俳優らしい。

私はオーストラリアにクライムサスペンス映画が似合うとは全く思っていなかったが、オーストラリア発、至高のクライムサスペンスとは？

■□■原題は『The Dry』VS原作と邦題は『渇きと偽り』■□■

本来、日本は四季に恵まれた美しい国だが、近時の日本は春と秋がなくなり冬と夏ばかりになっている。また、初夏の集中豪雨と晩夏の台風は近時激しさを増して、水害や土砂災害が多発している。他方、アメリカではなぜか女性の名前が付けられたハリケーンが近時猛威を振るっている。

それに対してオーストラリアは干ばつに悩まされている国らしい。ちなみに、オーストラリア映画によく出てくる「アウトバック」は、オーストラリア内陸部の荒地を指す言葉らしい。本作冒頭は、「豪州地方圏のキエワラは、324日雨が降っていない。その結果、土地は枯れ、国の補助金が必要なほど貧しくなっている。ルークはそれが原因で無理心中を図った・・・。」という字幕が流れるが、1年間も一滴も雨が降らない状況は日本人には想像できない。

本作パンフレットには①芝山幹郎氏の「渇いた土地と渇いた心」②高野水登氏の「人を殺人に至らしめるもの」③青木創氏の「原作に忠実な、乾ききって正気を失いかけている町」という3本のレビューがあり、そのすべてがオーストラリアの大地の“渇き”について解説している。しかし、本作の原題は単純に『The Dry』だが、原作と邦題は『渇きと偽り』。それは一体なぜ？どちらがベター？

近時は素人でもドローンによる撮影が容易にできる時代になっている。本作冒頭のスクリーン上に映し出されるオーストラリアのウィムラ地方のDRYぶり（＝干ばつぶり）はすごい。草木が一本もなく、一面干からびた荒地では、牛も羊も生きていけないのは当然だが、そんな干からびた農地（？）の中にある一軒家の中で、ルークは妻子を射殺し、自身は荒野の中で自殺したらしい。それは一体なぜ？昨年夏の熱海の土砂災害も怖かったし、今年夏の台風15号被害も怖かったが、オーストラリアの干ばつも怖い。しかし、そんな自然災害以上に怖いのが、実は人間の犯す犯罪・・・？

■□■現在の事件と20年前の事件との絡みは？■□■

オーストラリア内陸部のキエワラの“渇き”の中で起きた現在の事件、すなわちルークの一家心中事件を、連邦警察官のアロンが捜査しているのは一体なぜ？そもそも、地元の人たち、とりわけエリーの父親マル・ディーコン（ウィリアム・ザッパ）やエリーのいとこのグラント・ダウ（マット・ネイブル）が、アロンの帰郷に猛反発したのは一体なぜ？私が思うに、いかにルークの父親から一家心中事件の調査をしてほしいと言われても、連邦警察から何の命令も受けていないアロンには、そもそも何の捜査権限もないはず。その権限を有するのは、いかに新米で頼りないと言っても、地元警官のグレッグだけだ。アロンも当初からそれをわかっているから、あくまで“グレッグの補助”の体を装いながら動いていたが・・・。

映画にはフラッシュバックという手法があり、本作ではそれが20年前の4人組が遊んでいた時に発生した“エリーの水死事件”をめぐる多用される。大の仲良しの17歳の男女2人ずつの4人組がいつも一緒に遊んでいれば、どこかに恋心や嫉妬心が生まれるのは当然。すると、エリーの水死は恋のもつれ？それとも事故？20年前のウィムラ地方は干ばつに襲われていなかったから、川の水量も豊富だったらしい。教室でエリーとはじめてのキスを交わした17歳のアロンは、その続きを期待して(?)エリーに対して「川で待っている」と書いたメモ用紙を渡していたが、水死したエリーの体からそのメモ用紙が発見されたから、さあ大変！アロンが殺人の第一容疑者にされたのは仕方ない。警察や町中の疑惑がアロンに注がれる中、アロンはルークと2人でウサギ撃ちをしていたとのアリバイを主張し、ルークもそれに同調したが・・・。

本作は忠実に原作に沿って作られているそうだが、登場人物が多いうえ、現在と20年前の事件を錯綜させながら描いていくから、1度見ただけではわかりにくい。鑑賞後もパンフレットを片手に確認する必要があるほどだ。そんな中、自然災害である“渇き (Dry)”と共に描かれる、人間の悪しき営みである“偽り”とは・・・？

■□■一つの嘘が次の嘘を！20年前の偽りが今回の事件を！■□■

推理小説の醍醐味は、当然犯人探し。シャーロック・ホームズも明智小五郎もその能力に長けていたが、連邦警察官のアロンは新米警官のグレッグよりその能力に長けていたらしい。その結果、本作でもラスト近くになると、ルークの事件が実は心中ではなく“犯人 X”がいたことが明らかになる。その動機はウィムラ地方の渇きと補助金行政にあったようだが、そのことにアロンやルークの旧友であるグレッチェン（ジュネウィーヴ・オーライリー）やルークの農場近くの土地を持つ農夫ジェイミー・サリバン（ジェームズ・フレッシュヴィル）たちは、いかなる関係を・・・？

他方、たった一つの小さな嘘が次第に大きなたくさんの嘘に結びついていくことはスリラー映画ではよくあるが、本作における、最初のたった1つの小さな嘘とは一体ナニ？我が息子アロンがいつもつるんで遊んでいる4人組の1人であるエリーを殺すはずがない。

アーロンの父親エリック（ジェレミー・リンゼイ・テイラー）がそう確信していたのは当然、そのため、警察や町の人々が一齐にアーロンに疑いの目を向ける中でも、父親は断固それに対抗していたが、ある日、ある時、「1度だけ聞く・・・。」と前置きしてアーロンに質問したこととは・・・？

20年ぶりにキエワラに帰郷してきたアーロンに対して、執拗な嫌がらせをするエリーの父親やいとこの姿は、ある意味常軌を逸しているが、その恨みつらみはわからないでもない。だって、アーロンは疑いを晴らせないまま父親とともにキエワラの町を逃げ出していったのだから。それが今、連邦警察官に出世したからといって、ルーク一家心中事件を調査するために戻ってくるとは・・・？本作については複雑かつ巧妙に設定された伏線をしっかり理解しながら犯人捜しをしなければならないが、それ以上に『渴きと偽り』と題された原作と邦題の意味をしっかり考える必要がある。

■□■水害も怖い、火事も怖い。一体どんな結末に？■□■

近時の日本で、“線状降水帯”という言葉が毎週のようにニュースになっている。線状降水帯の下では、1時間に100mmもの集中豪雨になるから怖い。しかし、逆に1年間1滴も雨が降らず、すべてが干からびた状態の中で、誰かが身体にガソリンをかけ、それに点火すれば・・・？その火はその男だけでなく、瞬く間に周囲に燃え広がり、ウィムラの町にある、スコット（ジョン・ボルソン）が校長を務める学校まで燃やしてしまうのでは？本作ラストでは、犯人探しの醍醐味と共に、そんな火事の怖さも現実化するのだから注目！

なるほど、ルークの一家心中殺人事件は、ルークの父が見込んだ通り無理心中ではなく、ウィムラ地方の干ばつとそれに基づく“補助金行政の歪み”が生み出したものだったらしい。しかし、今それがアーロンの捜査によって判明すれば、20年前のエリーの水死事件の真相も同時に判明するの？それについては、アーロンが、ルークからの提案によって“ある嘘”をついていたことが明らかになるが、その嘘を聞かされたグレッチェンはそれに合わせてさらにどんな嘘を？なるほど、神の摂理が織りなす渴き（The Dry）という自然現象も怖い、人間が織り成す嘘の連鎖はそれ以上に怖い。エリーが川にやってこなかったため家に戻ったところで父親から、エリーの水死を聞いたアーロンは、急いで川に戻った。彼がそこで見た風景とは・・・？なるほど、すべてがこんなクライムサスペンスだったの！

原作の素晴らしさと共に、本作の素晴らしさを堪能。

2022（令和4）年 10月 17日記